

## 第20回

## 第3章 現代を生きる人間の倫理

## 人格の尊厳 ～カントの思想～

## 今回学ぶこと

西洋近代を代表するドイツの哲学者カントの思想を学習し、批判哲学の意義や、自律としての自由について考える。それを通して、カントの説いた「人格」について理解し、人間の尊厳について考えを深める。また、カントの「目的の国」について理解を深め、望ましい社会のあり方や人類の永遠平和について考える。



講師

小林和久

## ■ 批判哲学の意義 ■

18世紀ドイツの哲学者カントは、それまでの哲学で説かれていた経験論や合理論の問題点を明らかにして、新しい「批判哲学」を説く。カントによれば、経験論は確実なことがわからなくなる懐疑論におちいる危険があり、合理論は理性だけを頼りにした独断論におちいる危険がある。そしてカントは、「私は何を知ることができるのか」について考え、人間の認識能力の限界を明らかにしようとした。カントは、人間の認識は、経験できるこの世（現象界）のことに限られ、神や魂の不死など、この世を超えたことや、事物そのもの（物自体）を認識することはできないと説く。つまり、人間は生まれつき感性や認識能力の形式をもっていて、外からの感覚的経験をそれに当てはめて、物事を認識したり考えたりしている、と言う。カント以前は、外界の事物が存在することを前提にして、人間の認識はそれをそのまま写しとっていると考えられていたのに対し、カントは、外界の事物そのもの（物自体）は認識できず、人間の認識がさまざまな経験から外界の事物を構成している（主観が客観を構成する）と考えたので、このような哲学（認識論）の変革は「コペルニクスの転回」とも呼ばれた。

このように、人間の理性の能力を批判・検討して、人間の認識能力の限界を明らかにしたカントの哲学は、「批判哲学」と呼ばれる。



## ■ 人格の尊厳 ■

カントは認識論だけでなく、人間の自由や生き方についても新しい考え方を説く。今日「自由」という言葉は、「心のままであること」、「思い通り」などの意味で使われることが多い。しかしカントは、人間ならば誰でもいつでも、守らなければならない道徳的な義務の法則（道徳法則）に、自らの意志で従うことこそ、真の自由だと考える。つまり、自分の損得や利害を考えることなしに、しかも、他人に命令されるのではなく、自分自身の意志で、「それが義務だから」という理由だけで道徳的に行動する「意志の自律」を、人間にとっての自由だと考えた。つまり、人間だけがもつ理性を使って、自ら道徳法則を立て、その命令に従って、自らを律して生きる……これがカントの考えた「自律としての自由」であり、わたしたちの善い行為とは、このような過程で行われるものだと考えられた。

そして、そのように自らの意志で道徳的に生きるという自律の力を持つ存在を、カントは「人格」と呼び、人間はこの人格を持つがゆえに尊重されるべきだと考えた。つまり、人間が尊いのは、わたしたち一人一人が人格をもっているためだからである。したがって、人間は人格として、自分のことも他人のことも手段としてのみ扱ってはならず、常に同時に、目的として扱わなくてはいけない、ということ、カントは道徳法則の一つと考えた。この考えは、現代でも、人間尊重の精神や、人道主義のよりどころにもなっている。

## ■ ■ 永遠平和のために ■ ■

カントは、人間が互いの人格を目的として尊重しあう社会を理想として、それを「目的の国」とよぶ。そして、国際社会では国家同士が互いを人格として扱っていけば、戦争のない永遠平和が実現されると考える。この永遠平和という理想の実現に向けて、国々がもつ常設の軍隊をなくしていったり、国内の体制を民主主義にしたり、各国が共通して守る国際法を制定したり、世界の国々が連合できる国際平和機関を設立したりしなければならない、などの考えを提唱した。このようなカントの考えは、国際連盟や国際連合の原理ともなった。

## ◆ コラム ◆

今回のポイント1の「批判哲学」、かなり難しかったのではないのでしょうか？ この内容が書かれているのが、カントの『純粋理性批判』という本です。わたしたちは普通、何かを知る（認識する）とき、外部の対象（客観）をそのままわたしたちの頭（主観）がコピーしている、と考えがちです。しかし、カントはそんな考え方を逆転させます。もともとわたしたちの頭の中に、経験したものを秩序づける形式（カテゴリー）が備わっていて、それが外部の対象を整理することで、わたしたちは物事を認識している、と考えます。

例えば、舌を火傷したりして味覚が麻痺していたら、どんなに「おいしい」と評判の食べ物でも、その「おいしさ」を知ることはできません。わたしたちは、「おいしい食べ物」という物そのものを認識するのではなく、甘いとか辛いとかの味覚で経験したものを、頭の中の形式で「おいしい食べ物」としてまとめていることになります。つまり、「認識（主観）が対象（客観）に従う」という考え方を、カントは「対象（客観）が認識（主観）に従う」という考え方に逆転させるんです。

こう考えると、主観（私の心）が世界を構成する、ということになります。難しい考え方ですが、世界を楽しくするのも、つまらなくするのも、「自分の心次第」ということになるのではないのでしょうか。